

認知症の本人からの意見

日本認知症本人ワーキンググループ 会員 山田 真由美
(名古屋市西区認知症専門部会 委員、おれんじドアも〜やっこなごや 代表)

社会参加・就労 認知症になっても社会とつながっていたい、働きたい

- ・ 当事者同士が出会い、安心して話ができる場、支え合いながら前向きに生きていくための拠点、主体的な活動の場を、ともにつくってほしい。
- ・ 認知症になっても働き続けたい。そのための支援や合理的配慮（職場の人の理解促進、環境整備、配置転換など）を検討してほしい。
- ・ 認知症の“経験専門家”としての経験を活かすことで、仕事ができないか（アドバイザーなど）。

外出・移動 安心して外出を楽しめるために

- ・ 外出したいが、交通機関等の利用に不便を感じたりすることで、機会が減ってしまう。
- ・ 駅などの構造や表示の問題がある。利用しやすいように、できるところから改善してほしい。エレベーターがどこにあるのかわかりづらいので、表示をわかりやすくするなど。
- ・ 介助者と入れるような大きなトイレや身障者用のトイレが、まだまだ少ない。
- ・ 交通機関や銀行、お店の人などがオレンジリングをしていると声をかけやすい。

医療・福祉・介護 診断直後から“よりよく生きるサポート”を

- ・ 安心して受診ができ、わかりやすい説明を受けながら、納得して治療を受けたい。
- ・ 親身に相談にのってほしい。これからどのように生活していけばよいか、ともに考えてほしい。
- ・ 診断後すぐに、前向きになるきっかけになるような情報を提供してほしい（仲間が集まる場、認知症とともに前向きに生きる仲間たちの情報、今後について相談ができる場所など）
- ・ 同性介助を徹底するなど、人権に配慮した医療・介護を提供してほしい。
- ・ 専門職が認知症のことをもっと知ってほしい（オレンジリングをつけてほしい）。

災害時の対応 地域とのつながりから

- ・ 災害時、ひとりでは避難などが難しい場合がある。日頃から近隣の人たちとの関係を築き、いざというときのことも地域の人たちとともに考えておきたい。

正しい理解と当事者発信 正しい理解と“ちょっとしたサポート”で自立した生活を

- ・ 認知症の症状は、人それぞれ違い、できることも多いということを理解してほしい。
- ・ いろいろなことに時間がかかるが、自分でやれることはやりたい。待っていてほしい。なんでもやってしまうのではなく、“ちょっとしたサポート”をしてほしい。
- ・ 当事者も自ら発信し、必要な時には助けを求められるようになることよい（ヘルプカードの活用など）。
- ・ 市町村などの施策に、本人ミーティングなどを通して、当事者の意見を取り入れてほしい。当事者の声から出発し、ともに考えてほしい。

【参考文献等】認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）、一般社団法人日本認知症本人ワーキンググループ「どこで暮らしていても、尊厳と希望をもってよりよく暮らしていけるために」、地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター「本人にとってのよりよい暮らしガイド」、国際大学グローバルコミュニケーションセンター「認知症の人にやさしいまちづくりガイド」